

# 大学教育と社会の相互支援を目指した短期交換留学生インターンシップ ー 「グローバル化支援インターンシップ」パイロット・スタディ ー

恒松 直美

## はじめに

本稿では、2012 年度より大学教育と社会との相互支援体制の構築を目指して開講する「グローバル化支援インターンシップ」のためのパイロット・スタディについて論じる。この授業は、2003 年度より「広島大学短期交換留学生向けインターンシップ」として発展と充実化を図ってきた。短期交換留学生向けインターンシップは、大学や地域の国際化及び国際的な産官学連携の発展の課題と関連し、さらなる発展が必要な分野であると考えられる。新たに開講する「グローバル化支援インターンシップ」では、短期交換留学生をインターンとして派遣する地域企業・官公庁に対し、何らかの国際的貢献をすると同時に、受け入れる側も大学の国際教育と関わり、グローバル人材育成の発展が図れるよう進めていく。短期交換留学生インターンシップは、地域国際化の一助となり、グローバルな規模で支援のネットワークへと発展する可能性を持つ。本コースの継続と発展には地域企業のネットワークによる長期的視野からの支援が重要な役割を果たしてきたが、それらの地域企業に対し、グローバル人材育成の支援となるインターンシップの授業の開拓も今後の重要課題の一つとなろう。本稿では、2009 年度より進めている日本の高等教育とキャリアにおける意識変容の研究<sup>1</sup>の結果を生かし、交換留学生インターンシップを通じた、グローバル社会における大学と社会の連携による支援体制構築の可能性について、現在実行中のパイロット・スタディを基に論じる。

## 広島大学交換留学生向けインターンシップの授業の発展

まず初めに、広島大学短期交換留学生向けインターンシップの授業の発展の経緯について整理しておきたい。2003 年度より広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program=HUSA プログラム)<sup>2</sup>留学生向けに、広島大学短期交換留学生向けインターンシップ(「HUSA インターンシップ」<sup>3</sup>)を開講し、地域企業及び官公庁の協力と支援により発展させてきた。「HUSA インターンシップ」は、2011 年度で 9 回目を迎え、授業を改善しつつ、グローバル化社会への対応の発展に向け、新たな展開を迎えている。2010 年度より、授業を 2 段階に分類し、「HUSA インターンシップ I:キャリア理論と実践(HUSA Internship I: Career Theory and Practice)」（日本語中級・上級者向け）と「HUSA インターンシップ II:実践(HUSA Internship II: Practicum)」（日本語上級者向け）と題して開講している。「HUSA インターンシップ I」は、留学生

がインターンシップに向けて準備を開始できるよう、HUSA プログラム留学生が来日してすぐの後期(秋学期)に開講し、「HUSA インターンシップ II」は、後期に登録して翌年の前期(春学期)終了後に成績を出す通年開講の設定にしている。HUSA インターンの派遣は、通年で学生と企業との都合を調整し、冬季休暇・春季休暇・夏季休暇のいずれかの2週間に行ってきた。

近年、大学国際化の議論は、世界の留学生の獲得競争への対応や市場主義的なパラダイムから議論されることが多い。その議論自体は重要であるが、本稿では、その視点から少し離れ、学生の自己実現への模索と、グローバル社会における大学の国際教育と社会との連携による支援体制の構築の可能性について考察してみたい。2012 年度後期(秋学期)より新しい授業タイトルで開講する「グローバル化支援インターンシップ I:キャリア理論と実践(Globalization Support Internship I: Career Theory and Practice)」及び「グローバル化支援インターンシップ II:実習(Globalization Internship II: Practicum)」の準備として、現在パイロット・スタディを行っている。「グローバル化支援インターンシップ」へと改変した意図は、現在開講している「HUSA インターンシップ I:キャリア理論と実践」及び「HUSA インターンシップ II:実習」の授業を、グローバル化社会への支援となる授業へと発展させていくためである。HUSA プログラム留学生がインターンとして支援を提供すると同時に、留学生インターンを受け入れる企業側も、授業への関わりを通じて国際教育に関わり、その結果、自社のグローバル人材育成の教育の一環として役立てることを想定している。

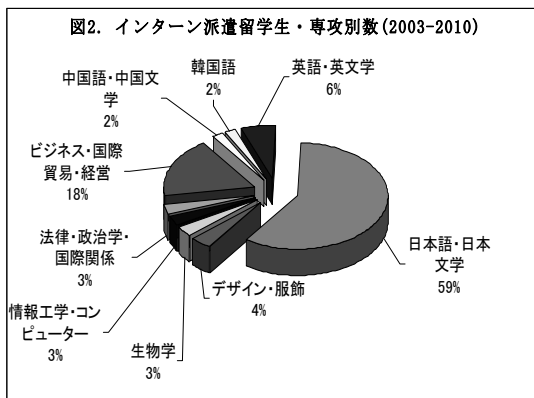
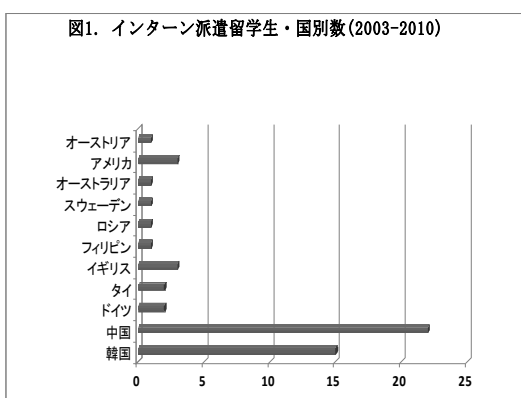
2011 年度後期より、交換留学生が日本社会とより関わることのできる授業へと変革する準備を進めている。大学教育と社会の相互支援体制の構築で着目している点は以下である。

- 1) インターン派遣の準備のための授業である「HUSA インターンシップ I:キャリア理論と実践」の授業で行っている「企業体験者講話」に基づいた PBL 教育法(課題発見解決型学習)<sup>4</sup>を使用した協同学習の場に、企業から招聘した講師も参加し、評価する。
- 2) 「HUSA インターンシップ II:実習」において、インターン派遣先の企業等のグローバル化支援になる仕事に取り組み貢献する。
- 3) 「HUSA インターンシップ II:実習」の課題として、派遣される企業のグローバル戦略の支援となる研究プロジェクトに取り組む。

現在、これらに着目したパイロット・スタディを行っている。まず、背景として、「グローバル化支援インターンシップ」開講に至るまでの経緯と HUSA プログラムの概要について述べておく。HUSA プログラムは 1996 年度に設立され、2010-2011 年度までに 537 名の交換留学生を受け入れてきた<sup>5</sup>。「HUSA インターンシップ・コース」では 2003 年度の開講から 2010 年度前期(春学期)までに 52 名の交換留学生インターンを広島大学のある東広島市周辺の地域企業及び東広島市役所に派遣してきた。インターンとして派遣した留学生の国別数と専攻別数(2003-2010)について図 1 と図 2 に示した。HUSA プログラムは発足から主言語を英語とする特色を持ち、日本語レベルが初級・中級の留学生にも日本留学を可能にしたプログラムである。プログラム参加条件は「日本語または英語で授業の受講が可能」で、毎年受け入れている約 40 名の交換留学生のうち約 5~7 名程度が日本語上級レベルである。HUSA プログラムに参加

する交換留学生の大多数は、「日本語」及び「日本文化・日本社会」への興味から留学している。日本語の言語能力の習得か、日本が持つ独自のテクノロジーなど日本に特化した知識、または国際関係などでアジアや日本を専門とする学生がより日本について理解する目的で留学している場合が多い。したがって、日本語能力を習得し、「日本事情」などの授業を日本語または英語で受講し、日本文化・日本社会に関する理解を深めて自身の専攻に役立てることを主な目的としている。

より多くの HUSA プログラム留学生が大学教育と実社会とを関連づける機会を持ち、キャリア構築に向けてインターン派遣を目指した授業を受講可能となるよう、2010 年度に「HUSA インターンシップ I：キャリア理論と実践」と「HUSA インターンシップ II：実習」の 2 つの授業に分類して開講した。「HUSA インターンシップ I：キャリア理論と実践」の授業では英語と日本語の両言語を使用し、日本語中級の学生も受講可能とすることで、より多くの留学生が日本社会との関わりを持てる授業にした。<sup>6</sup> この授業は、インターン派遣に向けての実践的準備に加え、留学生と正規学生が国際的視野から共に大学教育と社会との関わりについてホリスティックに考える機会を創出することを目的とし、「企業体験者の講話」及び講話に基づいた交換留学生と正規学生の協同学習を 2010 年度後期より導入した。**PBL (Problem-based learning) 教育法 (課題発見解決型学習)** による協同学習の授業では、文化を超えて学生が活発に議論し、日本社会・産業界や仕事について学生が自主的に調査を進め、多角的に課題を分析する場となっている。



### グローバル化した知識社会における大学国際化の課題と実践知への関連付け

今日、国際競争にさらされる日本の大学は、従来の大学システムと改革の必要性との狭間で多くの課題に直面している。Mestenhauer and Ellingboe (1998)は、大学国際化の困難の一つに国際教育の概念化の不明瞭さを指摘する。他の教育プログラムとの統合の仕方、責任の所在、「国際」と「国内」のバランス及び「専門」とのバランス、教育的効果等である。短期交換留学生向け授業である「HUSA インターンシップ」は、カリキュラム上の位置づけ、

他の授業との関連付け、大学教育の学術知と社会での実践知の関連付け、日本社会におけるグローバル人材育成など多くの課題と関連する授業である。Volet and Ang (1998: 219) は、国際カリキュラム構築上の問題として、**1) 多くの教育者がまだ多様性を歓迎していない現状、2) 養成すべき文化的・経済的・知的資産としてよりも修正すべき問題として捉える傾向、3) 授業での学びを実際の社会的・グローバル的な文脈においていない場合が多い、**等の問題を挙げる。これらは国際教育における知識パラダイムの問題であり、既存の知識体系と国際教育をどう関わらせるか、また、学術知を現在日本社会が直面するグローバル人材不足の問題解決にどう関連づけるか、の課題をも含む。また、Aulakh (1997)は、大学国際化の主な特徴として、**1) 教員と学生の相互の学びの促進、2) 海外及び地域の学生のニーズに応えられるシステム、3) 学生間の相互依存を構築し多様な視野から見る目を養う、4) 多文化を包含した教授法と多様性を反映した教材の使用及び国際的に関連のある質の高い授業の提供、**を挙げる。これらの特徴は、現在の大学教育に付加的に追加するものではなく、知識構築とその応用・実践のあり方のパラダイム転換を問うものである。

これらの理論的背景を踏まえ、「HUSA インターンシップ」では、多様な背景を持つ学生が多角的視点を持ち寄って議論し、大学教育と実社会とのつながりについて学び、日本留学の体験を実際に社会体験に生かす場を持つことを目標においた。学生が協同学習を通じて、異なる価値感を持つ他国の留学生と議論する場を持つことは、世界に実存する知識と視点の多様性の現実を体感する貴重な学習の機会となる。留学生と日本人学生の協同授業を望む声は、留学生からも日本人学生からもインタビューにおいてあった。<sup>7</sup> 留学生との交流を希望しながらも具体的な係わり方が分からず、言語の障壁と異文化と接触する体験の不足から躊躇している学生が多く存在する現実も、学生へのインタビューから明らかになってきた。より多くの学生が実践知と結びついた国際教育の機会を持てるよう、2010年度の「HUSA インターンシップ I : キャリア理論と実践」で「企業体験者」の講話を全学公開として導入し、HUSA 留学生と本学学生の協同学習の場を創った。<sup>8</sup> 講話内容は、仕事の多様性・組織と人の関係・人と仕事の価値づけ・地域の町づくりなど、講師の実体験をもとに仕事を多角的に理解する講義となっている。

講話についての学生のアンケート調査及び講話についての感想のレポートによると、学生の講話からの学びは、**1)日本企業・企業文化、2)キャリア・就職活動、3) 大学教育の意味・自分探し、4)自身の生き方、5)企業のプロからの刺激・視野からの広がり、**の5点に集約できた。<sup>9</sup> 人と組織との関わり、自分の存在価値と仕事をする意味、学生と社会人との相違を認識することで刺激を受け、大学教育への動機が明確になる機会を持っている。「自分探し」をし、進路を模索する段階にある学生にとり、グローバルな環境で社会について学ぶ体験は学生生活に影響をもたらすが、社会人の体験や考えを多国籍の学生が授業で一緒に聴く機会は、本学ではまだ少ない。

現在、厳しい経済状況を反映し大学と産業界の関わり方も変化してきている。企業はグ

ローバル競争に勝つため、即戦力となる優秀なグローバル人材を求めて大学に対しその教育成果の提示を求めている。これらの企業は実際に海外に出向き、現地で直接採用したり、海外のビジネススクールに出かけて直接学生にアプローチし採用するなど、場所を選ばず世界的な規模で人材を発掘している。<sup>10</sup> 大学もグローバル人材育成を教育成果として掲げ、大学全入時代における学生の獲得競争を余儀なくされている。現在、日本の大学でもカリキュラム改革と国際的経営戦略は重要課題であるが、大森(2010)は、高等教育のグローバル化の議論において日本の大学の存在感が薄い現実を指摘する。<sup>11</sup>

日本社会におけるグローバル人材不足の問題と大学の国際化の課題は、日本的雇用システム及び日本の大学教育の成果とグローバル社会との適合性の問題とも密接に関連している。大森(2007: 16-17)は、正規雇用の流動性の低い日本的雇用システムが、流動する知識労働者の組織超越的・普遍的な知識技能と創造性・活力により競争力が支えられる今日の知識社会に適合しないと論じる。つまり、正規雇用の流動性の低さを要因とする組織超越的・普遍的知の有用性の低さがグローバル社会への対応の遅れをもたらしているとの指摘である。大学教育が提供する「学術知」と雇用システムが求める「実践知」の不適合の問題とともに、今日のグローバル化した知識社会に対する日本の高等教育の対応の遅れと知識労働者の流動性の低さは深刻な問題であると主張する。このような状況において、短期交換留学生向けインターンシップは、日本に興味を持ち、日本社会と将来関わることを希望し、日本での就労を夢に持つ交換留学生が、将来的にグローバル人材として日本社会に貢献する可能性を広げていく布石となる体験である。

今日、グローバル社会の現実に対応できるよう、大学に多国籍の人々が集い、学生が国籍を超えて多角的に学び、「生きた人」と実際に接触して議論しつつ学ぶ場を創ることが必須になっている。実際に人と会い、コミュニケーションできて初めて、学生は生きた知識をグローバルな文脈に置くことが可能となる。多様な背景を持つ学生との協同学習は、少数による行動がすべてに影響を与えるというグローバリズムの影響を実感する場ともなる。協同学習は、相互に「人」として接する体験を通じて、皆が人間として類似した問題や懸念事項を持つことを理解すると同時に、知識や視点の多様性に触れ、自らの世界観を問い直す機会となる。大学教育とキャンパスの文化は、学生のグローバル社会についての世界観の形成に重要な影響を与える。

学生が大学で「知」をグローバル社会とどう結びつけて学び得たか、そして、授業や協同学習で誰と関わりどのような知の多面性に触れたかは、学生が社会に出た後、「人」としてグローバル社会や世界の人々とどう関わるかを決定する。つまり、学生の体験する大学における国際教育のパラダイムが世界の文化形成の源になる。大学とはその後の学生の行動様式を決定づけるだけの影響を与え得る場であり、学生がその後の人生において異文化の人々と接する行動様式と世界の多様な人々と構築する思考様式に大きな影響を与える場である。したがって、HUSA インターンシップ・コースで創る多国籍の学生の学びの場は、

学生がグローバルな視点から自身と社会とのつながりや、個人として社会とどう関わって  
いけるのかを考える貴重な国際教育の場である。交換留学生の自己実現の可能性と現在必  
要とされているグローバル社会に対応できる人の育成とを連携させ、学生の力と可能性を  
引き出す教育が必要であろう。

### 「グローバル化支援インターンシップ」への発展のためのパイロット・スタディ

2012 年度に開講する「グローバル化支援インターンシップ」の授業の準備として、2011  
年度後期（秋学期）の「HUSA インターンシップ」の授業において、交換留学生によるグロ  
ーバル化支援の実行可能性を検証するためのパイロット・スタディを実施している。その  
実施内容を以下に挙げる。現実的にどのような形で進められるのか、支援は可能なのかを  
探る目的で実施している。

- 1) 企業講師による人材開発セミナー（2011 年度後期実施）
- 2) 企業講師（講話担当）による PBL 協同学習の評価・コーチング（2011 年度後期実施）
- 3) 留学生インターン派遣先のグローバル化支援のための仕事の開拓
- 4) 「グローバル化支援研究プロジェクト」の取り組み
- 5) 「グローバル化支援研究プロジェクト」の企業によるコーチングと評価  
\*3)4)5)は 2011 年度後期実施中
- 6) 留学生インターンによる新商品開発に向けた発案（2010・2011 年度実施）

現在、「財団法人倉橋まちづくり公社」（呉市）の運営する健康増進施設である「Wing 倉橋」  
の協力により、3),4),5)についてパイロット・スタディを実施し、インターン受け入れ先の  
グローバル化支援となるインターンシップの在り方を模索している段階である。2)に関し  
ては既に 1 回実施し、3)と 4)に関しては、現在、試行錯誤しつつ進めている。2011-2012 年度  
のインターンシップが修了する 2012 年 7 月に、5)の受け入れ先による評価を行う予定であ  
る。またプロジェクトの過程においても企業評価を導入し、現実に即した指導・助言を取  
り入れることで、実際にグローバル化支援となる交換留学生インターンシップの実行可能  
性を調査している。以下に 1)~6)の詳細を述べる。

#### 1) 企業講師による人材開発セミナー（2011 年度後期実施）

2010 年度より、「企業体験者講話」に引き続き、次週に PBL 協同学習を行う形式で授業  
のスケジュールを組んでいる。2011 年度後期の授業において、講話のすぐ次の時限の授業  
で、講話を担当した企業講師による「顧客体感セミナー」を開催した。まず、第 1 部で、「成  
長し続ける人生を生きるために」と題し、日本の人事制度、企業の抱える総合的課題、問  
題解決に向けての施策、仕事の報酬の意味、人の志など、仕事と人との関わりに焦点をあ

てた企業講師による全学公開の講話を行った。第 2 部では、「顧客体感セミナー」と題し、企業講師がこれまで企業での人材開発の指導のために行ったセミナーを開催した。経営する側が顧客の気持ちを体験し、顧客に対するサービスを改善していくためのセミナーを留学生に行っていた。

学生は「顧客体感シート」に自らの顧客としての体験を記載して持参し、グループで顧客として感じたことをまとめ発表した。その結果、フランス、タイ、日本における顧客としての体験について多様な意見が出た。「真実の瞬間(moments of truth)」(顧客が企業のあつ部分に触れ、サービスの質について印象を持つ出来事)、「顧客価値のレベル」(顧客が抱く価値の 4 つの段階)、「働く価値観についてのアンケート」などを通じ、学生は、顧客としての立場から仕事を見つめ直し、サービス提供の意味を考える機会を持てた。多国籍の留学生が参加するセミナーでは、顧客体験についてのグループ・ディスカッションにおいても、国により異なる体験談が登場する。実際、セミナーを担当した講師は、これまで日本人を主な顧客とし、日本国内での体験をもとに顧客体感セミナーを行ってきた。したがって、多国籍の学生が参加するグローバルな環境でセミナーを行い、普段想定している範囲を超えた異なる文化圏における体験談もディスカッションに加わる結果となり、新しい世界についての知見をもたらしたとの見解であった。

## 2) 企業講師(講話担当)による PBL 協同学習の評価・コーチング(2011 年度後期実施)

「HUSA インターンシップ I:キャリア理論と実践」に導入した「企業体験者講話」に基づいた PBL 教育法(課題発見解決型学習)を使用した協同学習の場に、講話を担当した企業講師にも参加してもらい、プレゼンテーションの評価をお願いした。

## 3) 留学生インターン派遣先のグローバル化支援のための仕事の開拓 (2011-2012 年度後期実施中)

「HUSA インターンシップ II:実習」において、できる限り、派遣先の企業等の支援になる仕事に取り組むための施策である。財団法人倉橋まちづくり公社(呉市)の経営する「Wing 倉橋」との国際交流行事を「HUSA インターンシップ II」の授業の一環として企画し、その業務に教員のアシスタントとして HUSA インターン 3 人が携わっている。「グローバル化支援」となる仕事を創り出し、試行錯誤で進めている。まず、担当教員自らが、新しく歴史見学及び地域との国際交流を盛り込んだ「長門造船歴史館・倉橋歴史民族資料館見学&地域交流」(2012 年 2 月 26 日実施予定)と題した国際交流行事を「HUSA 留学生」に向けて企画した。その企画のプランニング及び支援のインターンの仕事について以下に示した。

A. インターン 2 人(出身国はアメリカと中国)が行事遂行のための下見を教員と一緒に、職員との事前打ち合わせの会議に出席した。教員が作成した行事の広報用のポスターと会議での決定をもとに、HUSA 留学生への参加申込用紙を英語と日本語で 2 人が作

成し、教員の指示をもとに完成させた。「Wing 倉橋」の広報用のリーフレットの英語版の作成も試みる。

- B. もう一人のインターン（カナダ出身）は、主に通訳ガイドとして、造船歴史館の英語ガイドを当日行うための準備を進めている。また広島大学から目的地までのバスの中で、音戸の瀬戸を海運交通の要所として切り開いた平清盛や呉市の歴史などについて英語でガイドを行う。また、国際交流行事当日、現場で「Wing 倉橋」の職員が日本語で行う学生への案内を、インターンが英語に通訳する。さらに、「Wing 倉橋」の日本語のホームページを英語に翻訳し、ホームページの英語版を作成する支援をする。

これらの仕事の意義は以下に要約できる。

- 1) 教員自らがこのような企画をしてインターンに支援させることで、留学生インターンが国際交流事業に携わる機会を日本留学中に持てる。大学教員が地域企業や組織と交渉する現場を観察し、公式の場での日本語の使用方法や礼儀を学ぶ。
- 2) 教員自らが留学生インターンと仕事をするにより、教員自身が学生の実際の仕事能力を把握し、現実に即した今後のインターンシップの対応策を練ることができる。
- 3) 地域との国際交流行事を進める過程で、留学生と接し関わる施設の職員も「グローバル化」を意識する。職員は、実際に外国人と接した体験が少なく、HUSA 留学生との交流の体験により、外国人に対する意識も変容する可能性が高い。

このように「HUSA インターンシップ」を新しい形で開講する背景の一つには、「HUSA インターンシップ II:実習」を日本語中級の学生も受講可能とするための意図もある。原則として、実際に留学生をインターンとして派遣する実習の授業は、日本語上級を受講条件としてきた。しかし、実際には、日本語中級の学生の場合でも、学生が実習を受けることを切望する場合は、交渉して実際に派遣してきている。2011 年度も同様、日本語中級の留学生も派遣できるよう動いている。その過程で、2011 年度の新しい試みとして、担当教員が短期交換留学生のための歴史見学と地域との国際交流の行事を企画し、日本語レベルが中級の学生二人（出身国はアメリカとカナダ）と日本語上級の学生（出身国は中国）が支援するインターンシップを作った。現実的には、日本語上級でも実務経験のない留学生が使用可能な書類を自力で作成することは不可能である中、中級の学生も起用しインターンシップを体験できる機会を作る意義はあると考える。地域との国際交流行事でも、3人が教員の詳細な指導のもと、使用する申込書や書類を日本語と英語で仕上げる結果となった。

#### 4) 「グローバル化支援研究プロジェクト」の取り組み（2011-2012 年度後期実施中）

「HUSA インターンシップ II:実習」の課題として、派遣される企業のグローバル化に貢献できる「グローバル化支援研究プロジェクト」に取り組む。2011 年度は、初めての試みであることから、パイロット・スタディとして、学生全員が一つの財団法人について取り組むこととした。



学生 11 人を 3 つのグループに分け、3 つのテーマに取り組んでいる。一つの組織に焦点を当てて皆で取り組む過程で、学生の現実的な力を把握することができる。2011 年度は、「Wing 倉橋の職員を国際化する方法」・「Wing 倉橋の施設を国際化する方法」・「Wing 倉橋の集客力を上げる方法」の 3 つのテーマに各グループが取り組んでいる。今回の調査では、グループ間で相互の支援し合い、刺激も与え合うこともできる。プロジェクトによる企業と留学生へのメリットを以下に述べる。

#### <企業のメリット>

\* インターン派遣前の事前調査で留学生が企業について知識を習得しつつ支援するため、受け入れ側のモチベーションが上がる。

\* 学生が授業の課題として調査に取り組むため、企業内の時間・資金の制約の問題を軽減する。

\* 留学生の語学能力・自国文化の知識を活用できれば、新市場の開拓・企業の活性化・グローバル進出の支援となる。

#### <学生のメリット>

\* 学術知と実践知を融合した実践的学びの場を持てる。

\* 支援する企業の研究プロジェクトに取り組むことによりモチベーションが上がる。

過去インターンシップを体験した留学生からは、「派遣される企業について知識を持っておきたい」、「派遣される企業なので、事前調査はやる気が出る」との意見があった。

\* プロジェクトに関して企業と直接接触し、企業からの指導・助言を聴く機会を儲けることで、改善策を練り、学術知と実践知を結び付けて考える機会を持つことができる。

### 5) 「グローバル化支援研究プロジェクト」の企業によるコーチングと評価

#### (2011-2012 年度後期実施中)

受け入れ企業による「グローバル化支援研究プロジェクト」のコーチングと研究成果の評価を行えるよう進める所存である。研究プロジェクト終了後は、プレゼンテーションをその調査対象の企業や組織の参加を得て行い、評価も行う予定である。現在、そのパイロット・スタディを上記 4) のように進めている。パイロット・スタディの結果を見て、2012 年度より、企業から出された調査テーマについて研究プロジェクトを行う形で進めたいと考えている。

### 6) 留学生インターンによる新商品開発に向けた発案 (2010・2011 年度実施)

2010 年度と 2011 年度に、広島県竹原市にある S 社において、HUSA インターンが外国人の視点から商品開発の発案を行なった例がある。竹原市は江戸時代より塩田の歴史を持ち、三百年以上に渡り竹原の文化と経済を支えてきたと言われ、S 社がその塩を使用し、天然海水を使用して風水盛塩の商品に仕上げ、風水パワーと清めの意味と効果をもたらすインテ

リアとして商品開発した。盛り塩は中国の故事に由来し客の足を止めるための縁起ものとされているが、2010年度は香港出身でイギリス協定大学からの留学生（男性・日本語とビジネス専攻・学部3年）、2011年度は中国出身（女性・日本語専攻・学部4年）と韓国出身（女性・日本語専攻・学部2年）のHUSA留学生を派遣した結果、いずれも自国の歴史や文化の知識及び外国人の視点から新しい商品開発のアイデアを出す結果となった。

2011年2月には、HUSA インターンを受け入れた企業代表の発案により、2週間のHUSA留学生のインターンシップの成果発表会を開催した。写真1は、開催されたS社におけるHUSA留学生インターンの「出発式」での、インターンシップ成果発表のプレゼンテーションからの抜粋とその様子である。今後も、交換留学生のインターンシップの成果を明確な形で社会及び企業等に提示していくことが、相互の支援体制を構築していく上で重要となるであろう。



写真1. 「HUSA インターンシップ 出発式」風景とプレゼンテーション（一部抜粋）

## グローバル社会における大学教育と社会の相互支援体制の構築

現在、日本社会においてグローバル人材不足の問題が深刻化する中、自己実現を模索する学生の視点からは、大学教育の意義づけ及び教育成果とその後の社会生活との関わりをどう見出すかは重要課題である。その状況下、大学と社会との連携による教育機会の提供は重要な問題である。大学教育の場は、グローバル人材育成・異文化理解・国際教育の場として自己実現の課題へのヒントを提供し得る場であり、学生も社会人も相互に何かを還元し得る場となる。社会人へのインタビュー<sup>12</sup>から明確になったことは、多くの社会人が社会人としての体験を通じ、新しい視点から大学時代を思い起こし、再定義や再解釈を行い、思いが変容する傾向にあることである。社会人が社会体験を大学教育に還元することは、学生の自己実現の模索に新しい知見をもたらすと同時に、社会人にとっても、自らの人生

の意義と自己実現の体験を教育現場に還元することで社会体験の意義を見つけることにつながる。

このような大学教育と社会との双方からの支援体制の構築は、よりグローバルに展開していくことが重要となる。全世界からの留学生が集まる短期交換留学生のインターンシップの授業を通じて、グローバルな視野から大学教育と地域社会をつなぐことができる。交換留学生の多くが自らの将来を模索する段階にあり、帰国後の進路決定を迫られる状況にある。HUSA プログラム留学生は、大多数が学部生で、日本に初めて留学し、日本での社会体験がないため、インターンシップについて不安を抱えていると同時に、的確にその意義を社会的文脈においていない学生も多い。学生の不安要因は、社会で通用する日本語能力の不足と、社会体験の不足から社会人としての行動様式が身につけていないことである。日本という外国で社会人の中に入り自分は何かできるのかについて学生が不安に思うのは当然である。社会人を企業体験者講話や PBL 協同学習などに招聘して明らかになったことは、今後は留学生が日本の社会人と接触する機会を増やし、日本社会への垣根をなくす重要性である。社会人との接触の少なさが、大学外の日本社会と世界をより未知の世界に見せている。

さらに、大きな課題は企業側の負担である。交換留学生向けインターンシップの最大の懸念は受け入れ企業に負担をかけることであった。企業側からは、採用につながらないインターンシップについては企業側のモチベーションが上がりにくい現状や、実際には企業の負担であることの指摘があった。実際は、即戦力として留学生が役立つことはほとんどなく、採用にもつながりにくいいため、企業は労力と時間の無駄との認識を持っている。今後の重要課題は、有効的な交換留学生向けインターンシップの授業の構築である。PBL 協同学習における留学生の自主的な学習能力とプレゼンテーション能力、新しい商品開発に向けた発案の実例から、グローバル化社会において、社会との連携により短期交換留学生向けインターンシップの授業を学生と社会の双方に役立つ形にする可能性が見えてきた。留学生は社会人との接触を希望し、日本企業側はグローバル人材の不足の問題を抱えている。短期交換留学生向けインターンシップの授業を「グローバル化支援インターンシップ」として発展させ、留学生が日本社会と自国や世界への懸け橋となれる企画を行うことで受け入れ企業と社会に貢献し、企業側も多国籍の学生が在籍する HUSA プログラムと関わることで、企業内のグローバル人材育成に役立てることが可能となる。大学教育と社会の相互支援体制の構築は、双方向からの協力により双方が共に学べる意義ある形にすることで可能となると考える。

2003 年度の短期交換留学生向けインターンシップの開始より、地域企業及び東広島市役所においてインターン受け入れを継続してきたが、2 週間という短期のインターンシップの有効性の向上については大きな懸念事項であった。専門性やつきたい職業を限定するよりも広い社会体験を積むことを目的とするほうが、企業側も受け入れやすくなるとの指摘も

あった。実際、交換留学生はキャリアについて模索している段階にあり、イメージに捉われず多様な社会体験を積むことで、自分は何に興味があるのかを知るきっかけになる。経済産業省の提唱する、基礎学力や専門知識に加えて必要な「社会人基礎力」（「前に踏み出す力」・「考え抜く力」・「チームで働く力」の3つの能力）<sup>13</sup>の重要性の指摘とも関連する。

次に、「大学の国際教育と企業のグローバル人材育成の連携」に向けての大学教育と社会との相互支援の可能性について述べる。

## 1) 大学教育から企業・社会への貢献

### 1. 「グローバル化支援研究プロジェクト」により企業・地域社会を支援

＊企業が調査を希望する課題について留学生の持つ異文化の視点を生かして調査

### 2. 「交換留学生向けインターンシップの授業」による企業・地域社会への国際教育の提供

＊「グローバル化支援研究プロジェクト」のコーチング・評価によるグローバル・

リーダー育成の場の提供

- 日本企業におけるグローバル・リーダーの質・量の不足への貢献

- 若手企業人をグローバル・リーダーとして育成する場を提供

＊「グローバル化支援研究プロジェクト」について英語でディベート（予定）

- 多国籍の留学生と英語で論理的に討論する場の提供

## 2) 企業・社会から大学教育への貢献（メンター・コーチング制度）

### 1. 「グローバル化支援研究プロジェクト」の指導・助言を行い、社会人の経験を還元

＊メンターとして企業支援プロジェクト・プレゼンテーションを指導

（担当教員が日本語・英語で援助）

### 2. グローバル企業などの経験を学生に還元

### 3. 企業講師による人材開発セミナーなどの開催

（実例） 「顧客体感セミナー」 （実際に企業の人材開発の指導で使用）

これらの大学の国際教育と社会のグローバル人材育成の連携の構築を目指した授業の利点は、教育を目的として教育現場で行うため、損益についての懸念や実際の場面のような「失敗」の懸念がないことである。

## 結語 - 広島大学短期交換留学プログラムのグローバル・ネットワークと日本社会

日本留学中に大学外の日本社会と接触する体験が交換留学生に与える影響について、これまでのインターンシップの授業における社会体験者講話後のアンケートや課題のレポートから明らかになりつつある。交換留学に参加する学生は3・4年次の学生が多く、日本留学中の社会人との接触により、その後のキャリア構築に「日本」との関わりが現実化する可能性は高い。短期交換留学生のインターンシップと社会人との交流の体験がどのように

留学生の意識変容に影響するかについては、今後も「高等教育体験者の意識変容」の研究の一環としてさらに研究を続けていく。社会体験により、学生がどのように学問知と実践知の融合を図り関連づけていったのかも重要な調査項目である。

大学生と社会人も含めた高等教育体験者の意識変容の研究から明らかとなったのは、自己実現と社会における自分の在り方の問いは、学生のみではなく社会人にとっても大きな日々のテーマである現実である。大学3・4年次生の多い短期交換留学生は、その多くが進路に漠然と日本と関わることを描きつつも、その方策と実像が見えないでいる。2012年度後期より新たに開講する「グローバル化支援インターンシップ」は、まだ将来の定まらない段階で日本の大学に留学してきた交換留学生の国際教育の場を社会とつなぐ新たな可能性を持つ。

竹内(2011)は、ビジネスの世界において、「グローバルリーダーに求められる影響力～その根底にあるもの」において「個人的な信頼関係がすべての基本」であり、「グローバルな舞台で経験を重ねた人ほど、最終的には『個人対個人の信頼関係』である」と論じる。会社対会社や組織対組織よりも、大事なものはグローバルに個人としてのネットワークを作れるかが重要な鍵であると主張する。同様に、HUSAプログラムにおいても、各国の協定大学から「HUSAプログラム」という枠組みで広島大学に交換留学生として留学してきた留學生が築くグローバル・ネットワークの可能性についても今後は着目していく。HUSAプログラムのグローバル・ネットワークがもたらす世界的な視野からの産学連携のネットワーク構築の可能性についても調査を進める。

大学時代に大学外の世界と接触することは、就職で有利であるとの視点のみからではなく、大学生活を自らの将来と結び付けていくために、どう過ごしたいのかを再考するきっかけとなる。迷いを持つ社会人にとっても、大学のグローバル化と関わり、大学時代に将来に向けて自分探しをする異国からの留學生と接することで、自らの仕事の意義づけをグローバルな文脈から再考する契機ともなるのではないか。留學生にとり、日本で働く社会人と接し、大学外の世界を知り、仕事の意味やグローバル化における社会や企業の変化を知る機会が重要であるが、同時に、社会人にとっても、留學生との関わりは新しい世界を広げる可能性を持つ。グローバル社会において留學生と日本社会とを結びつけることで生まれてくる可能性は多様にあり、その可能性を今後の「グローバル化支援インターンシップ」と意識変容についての研究で探求していく。

## 注

- (1) 「グローバル社会におけるパラダイム・シフト: 日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」と題し、短期交換留学生・日本人学生・社会人を対象とし、高等教育とキャリアにおける高等教育経験者の意識変容について、大学教育と社会を連携させホリスティックに分析している。大学生が日々自分の生き方と将来について自分に問いかけ、社会とのつながりを求めて模索する姿や、社会人が仕事の価値づけと生きがいを求めて日々模索する姿が明らかと

---

なった。

- (2) これ以降、「広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program)」を「HUSA プログラム」と称する。
- (3) 「広島大学短期交換留学プログラム留学生向けインターンシップ」の授業を「HUSA インターンシップ」と称する。また、「HUSA インターンシップ」でインターンとして派遣される交換留学生を「HUSA インターン」と記述する。
- (4) 「PBL(Problem-based learning)」の日本語訳には、「課題発見解決型学習」、「問題解決型授業」、「問題基盤型学習」、「問題立脚型学習」などがある。本稿では統一して「課題発見解決型学習」を用いる。
- (5) 「HUSA プログラム」は、広島大学と全学協定を締結した協定大学と広島大学との交換留学プログラムを指し、交換留学生受け入れと本学学生の派遣の両方を含む。本稿では、「HUSA プログラム」のうち、主に受け入れ留学生について論じる。2011年11月の時点で64の協定大学及びUMAP(University Mobility in Asian and the Pacific, アジア太平洋大学交流機構)とUSAC(University Studies Abroad Consortium)の2つのコンソーシアムと協定を締結している。
- (6) 「HUSA プログラム」に参加する短期交換留学生は主に4つに分類された授業を受講できる。HUSA 留学生向けに英語で開講されている「Special Course」、既に正規学生向けに開講されている授業でHUSA 留学生も受講した場合は英語で補助教材を出す「integrated course」(英語圏出身の教員が英語で開講する授業もある)、正規学生向けに日本語のみで授業を受講する「Other Course」、HUSA 留学生向けの日本語の授業(日本語上級の授業は他のプログラムの留学生と共に受講)の4種類に分類できる。
- (7) 「グローバル社会におけるパラダイム・シフト：日本の高等教育とキャリアにおける意識変容の研究」の一環である。
- (8) 導入までの過程についての詳細は、恒松(2011a)参照。
- (9) 2011年5月28日に開催された「日本高等教育学会第14回大会」における研究発表『インターンシップと短期交換留学生の意識変容-企業体験者講話の導入-』(恒松直美)においても述べた。
- (10) 2010年9月6日に参加した東洋経済HRフォーラム2010「グローバル人材育成の最新潮流」(東京で開催)にて指摘された。
- (11) 大森(2010:14)は、グローバル化する高等教育において日本の存在感が薄いことへの懸念を表明している。アメリカ・イギリスと並びオーストラリアの大学も海外分校や現地提携校等を通じて高等教育のグローバル化を進め、近年はシンガポール、マレーシア、タイもアジアの「教育ハブ」として発展しつつある現状において、競争相手として「日本」が登場しないことを指摘する。
- (12) 「グローバル社会におけるパラダイム・シフト：日本の高等教育とキャリアにおける意識変容の研究」の一環である。
- (13) 経済産業省ホームページ参照。

## 参考文献

- Aulakh, Gursewak et al. (1997) cited in Kate Patrick, ed., *Internationalizing the University: Implications for Teaching and Learning at RMIT*. A Report on the 1996 Commonwealth Staff Development Fund Internationalization Project conducted by RMIT. (Melbourne: RMIT, 1997)6.
- Mestenhauer, Josef and Brenda J.Ellingboe (1998) *Reforming the Higher Education Curriculum: Internationalizing the Campus*. Phoenix, AZ: American Council on Education and Oryx Press.

---

Volet, Simone, E. and Grace Ang (1998) “Culturally Mixed Groups on International Campus: an Opportunity for Inter-cultural Learning”, *Higher Education Research and Development (HERD)* 17(1), April: 5-23.

大森不二雄 (2010) 「グローバル人材が躍動する社会を目指す教育・雇用改革 - 閉鎖する日本に対する唯一の処方箋 - 」 『大学マネジメント』 第6巻, 8号, pp. 12-22.

大森不二雄 (2007) 「知識社会に対応した大学・大学院教育プログラムの開発 - 学術知・実践知融合によるエンプロイアビリティ育成の可能性 - 」 『教育学年報』 第10号, pp. 5-43.

経済産業省ホームページ <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm> (2012年2月3日閲覧)

竹内秀太郎 「コラム グローバル人材・育成塾 連載第6回『グローバルリーダーに求められる影響力～その根底にあるもの』」 『BIZGate』 (2011年12月26日更新)

<http://bizgate.nikkei.co.jp/special/qlf/column/index.aspx?n=MMBIa5000022122011> (2012年1月28日閲覧)

東洋経済 HR フォーラム 2010 「グローバル人材の最新潮流」 (2010年9月6日)

<http://www.toyokeizai.net/ad/special/101018hr.html> (2011年6月10日閲覧)

恒松直美 (2011a) 「短期交換留学生向けインターンシップ授業における企業体験者講話とPBL (課題発見解決型学習)」 『広島大学留学生教育』 第15号, pp.47-61.

恒松直美 (2011b) 「日本高等教育学会第14回大会」における研究発表『インターンシップと短期交換留学生の意識変容 - 企業体験者講話の導入 - 』

## 付記

本研究は、科学研究費補助金 (2009-2011年度 課題番号 21530881 研究代表者: 恒松直美) の助成により行なっている研究の一環である。